

「満州」建国大学再考

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学史学地理学会 公開日: 2009-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山根, 幸夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/1628

「満州」建国大学再考

山根 幸夫

はじめに

筆者は数年前「〈満州〉建国大学の一考察」⁽¹⁾と題する拙文を發表したことがあった。これに対して多くの方々から助言や示教を頂いた。殊に元建国大学助教教授だった内海庫一郎氏⁽²⁾からは色々懇切な助言を頂き、また建国大学七・八期生の会報『八旗』第一〇号（最終号）を頂戴した。追手門学院大学教授岡崎精郎氏からも、元建国大学助教教授だった江原節之助⁽³⁾の手記「民族の苦悶―創設期の建国大学をめぐる」に、岡崎氏が解説を加え、注を施した文章⁽⁴⁾を頂戴した。これは江原の眼を通してみた初期建国大学の実態を如実に示したものである。建国大学の理想に傾倒し、その教育に熱中した江原の記す所は、筆者にとって実に貴重な資料である。

東大大学院（教育学専攻）に在席していた蔵田秀典氏は、戦時中に刊行されていた雑誌『興亜教育』⁽⁵⁾に、竹山増太郎「塾教育を中核とせる建国大学指導者教育」（一卷二号、一九四二・二）という論文のあることを教示され、そのコピーを私に恵与された。但し、竹山論文はいわば建国大学に対する表面的な観察にすぎず、建国大学の塾教育の具象は、上述の江原の手記や、『八旗』に載せられた元建大生の記録の方が、はるかに生々しく物語っている。勿論、

竹山論文も当時の建国大学の教育の概容を示したものである。便利な文献である。

以下、前稿を踏まえながら、建国大学の事態とその教育の在り方について再考察を試みることにしたい。

一 建国大学とは何であったか

前稿でも言及したように⁽⁶⁾、建国大学は文字どおり関東軍の手によって設立された学校であった。最初に建国大学の設立を提起したのは石原莞爾（参謀本部）であったが、実際に具体案を作成したのは、関東軍参謀辻正信⁽⁷⁾であった。但し、建国大学創設工作に参画したのはすべて日本人、殊に陸軍々人であった。軍人でなくして、関与したのは、僅かに寛克彦・平泉澄・作田荘一・西晋一郎らの若干の学者⁽⁸⁾であった。勿論、満州国民である漢人は、誰ひとりこれに参与しなかった。この一事から見ても、建国大学を満州国の最高学府⁽⁹⁾であったなどとみることはできない。

江原節之助は次の如く述べている。「建国大学は満州国の最高学府で、日本の帝国大学に相当するといふだけでは、此の大学の説明にはならぬ。関東軍の武力によって、一応体裁だけを整へてあるといふのが満州国の実相である。三千万民衆の興望によりなどと言ふのは文書の上の話だけで、実際は飛行機と大砲がなかったならば、満州国は成立しないのである。此の形だけのせい弱な国家^(?)を、真に三千万国民の国家に育て上げる為めには、国民の指導者を養成しなければならぬ。現在の官吏や知識人なる者は、大体古い頭脳の持主であつて、新国家の理想を体得して其の実に命がけで猛進することを恃むわけにはゆかぬ⁽¹⁰⁾」、「そこで将来の指導者を養成してゆこうといふのが建国大学である。武を以て開き、文を以て治むと考へると、これは旧式侵略主義の常套手段であるかのように見えるし、事実政府〔満州国―山根〕部内の日本人官吏の大部分は勿論のこと、設立発意者である関東軍の軍人の中でも、直接建国大学に関係を持たぬ者は内心それを肯定してゐたようである。建国大学が建国の理想を実現する中核的存在であるとすれ

ば、それは建国の理想に対する解釈の相違によって如何様にも考へられるのであるが、関東軍第三課（後に第四課となる）に居て、具体的に設立の衝に當つた辻正信は寸分掛値なしの真正直な考へ方で、創立の仕事を進めて来たのである。当時の関東軍の陣容は、司令官植田謙吉は万事下僚任せ、参謀長は東条英機で武断派の巨頭、参謀副長の石原はこれ又徹底した文治派の首領で、東条と石原は事毎に反目し合つてゐた。満州国政治を担当する第三課の課長片倉衷は、その間にあつて苦慮しつつ或時は東条の如く、或時は石原の如く、円転捕捉し難いものがあつた。……石原を尊敬して彼の思想に共鳴してゐた事は、『軍人で話のわかるのは石原位だろう』と言つてゐたのでも想像出来る⁽¹³⁾。

「建国大学は生立ちから言へば、関東軍の直轄学校であつてもよいのであるが、軍が満州国の指導者を養成するといふ法もなし、それに経費の点もあり、満州国政府に負はしつたのである。……権力者関東軍の生みの子である建国大学は、満州国文教の責任官庁である民生部（後の文教部）には何のつながりも持たず、國務院に直結された。それは國務院の中に建国大学を所管する箇所があるわけでもなく、大学の総長は國務総理の兼務になつてゐるといふ事と、人事と会計の事務が総務庁に關係を持つてゐるといふだけである。國務院では権力者関東軍の申し子にうかうか手を出して大火傷をすまいぞと全然嘴を入れぬので、建大は生みの親も育ての親も関東軍であるといふのが当時の實際であつた⁽¹⁴⁾」。

以上、大變長々と江原の文章を引用してきたが、建国大学の当事者の一人であつた江原の語ることであるから、何一つ嘘偽りはあり得ない。容赦なく建国大学の実態を描きだしたものである。「建大は生みの親も育ての親も関東軍である」という江原の言葉ほど、明確直截に建国大学の実態を表現したものはない。

このような実態がわかつていれば、どうして建国大学を「満州国の最体学府」だとか、「日本の帝国大学に相当する」などと安易に言うことができようか。江原も指摘する通り、建国大学は満州国における一般教育体制（文教部の

下における)に属するものでなく、國務総理に直結し、実際には関東軍第三課(後に第四課に改む)に直結する機関であった。而も建國大学は一般の人才を養成するわけではなく、もっぱら「満州国の指導者」を養成することを目的としていた。「指導者」とは具体的に何を指すのか明確でないが、筆者の理解では高級指導者ではなく、身を以て率先垂範する中堅指導者の養成を意図していたのではないかと思われる。それ故、後述するように必ずしも学科に重点をおかず、何よりも実践を重んずる教育方針がとられた。

然し、世間一般には建國大学の事態を、もっと華かな素晴らしい大学であると考えていたらしい。ある日本人の生徒は、受験に際して担任教師から次のように勧められた。「満州国は日本の延長のようなもので、百万人の日本人が住んで居る。建大は満州の帝大で、非常に難しい学校だが、満州は日本の生命線として国が総力を上げて建設中の国家だ。広大な国土と、豊富な資源に恵まれ、まさに若人の夢を托すに足る理想的大事業が前途に開かれている。建大こそは未来ある学校だ。俺がもし若かったら是非行きたいと思っている。それに学費は無料だし、学徒動員で出陣することもない⁽¹⁷⁾」。こうまで言われたら、受験生が心を動かして志願したとしても無理はない。それに「満州の帝大」という言葉は、受験生にとって大きな魅力であったろうと思われる。又、ある受験生は面接試験の際に、試験官に志望の動機を次のように語っている。「建大は満州の最高学府であり、満州は大東亜共榮圏を推進させる五族協和の国家であります。私としても今後アジアの発展に少しでも寄与するために、建大に入学⁽¹⁸⁾」。彼は同じ宿屋に泊った受験生について「彼等の話を聞いてみると、心から建大を志願し、満州の建國と五族協和の心意気にもえている者は一人も居ないではないか。単に他の大学〔予科―山根〕・高専よりも早く試験をやるから、待遇がいいから、官費だから、軍隊式服装が気に入ったからとか、満州だと出世が早いからなど愚にもつかない事ばかり並べている⁽¹⁹⁾」と、その動機の低さを批判している。然し、多くの受験生の志願した動機は、ほぼこのような処にあったのではあるまい

か。中には第四高等学校に合格しながら、敢て建大を選んだ受験生もいた。⁽²⁰⁾ 四高に入れば「帝大」への途は保証されていたわけであるが。

ある受験生は「上級学校案内書」を調べているうちに、「初めて知ったのが、満州国立建国大学の存在であった。王道楽土、五族協和の一大国家建設のための貞幹棟梁の士を養成するのがその目的であり、日（鮮）・満・蒙・白系ロシアの五族の若人が、起居を共にし、軍隊的規律の下に全員塾生活を行う特異な大学であることがわかった。しかも、学費不要、小費支給ときたら、安サラリーマンの三男坊としては、せめて高校、大学は親に負担をかけずに行きたいと願っていたことであり、ムラムラと関心が高まってきた。⁽²²⁾ 更に先輩の建大生が「雄大な大陸の自然の中で、五族の学生がのびのびと塾生活に、勉学に、スポーツに、農業訓練に汗を流しつつ青春をエンジョイしている。こせこせした狭い内地で、しかも勤労働員に明け暮れ、勉強どころでない日本の学生に比べ、まるで別天地だと、熱っぽく語ら⁽²³⁾」れては、若い受験生の気持が動くのも当然であった。彼らが五族協和の新国家建設という理想に夢を抱いたことも事実であろうが、それ以上に学費は不要である、小費いまで支給される、卒業後の進路も保証されていると聞けば、彼ら自身だけでなく、その父兄たちも進んで建大の受験を勧めたのではなかったかと考えられる。当時の中学卒業生の高専・大学予科への進学率は極めて低いものであった。それは父兄の学費負担が非常に困難だったからである。そのような条件の中で、当時の日本では軍部の学校や東亜同文書院、あるいは高等師範を目指す者が多かったが、建国大学志望もその一環であったといえよう。ある受験生が述べたように「満州だと出世が早い」といった気持は、受験生本人よりも、むしろ父兄にあったのではあるまいか。

さて、学生たちがどのような意図を抱いて入学してきたにしろ、建国大学では創立の理想に基づいて教育しなければならなかった。江原はこう述べている。「頼みの綱は建国大学だけだ。此処でほんとうの民族協和の学問を打ち立

て、民族協和の実績をあげて国内をリードしてゆくより外はない。満州が立派に育って行ったら、支那も見直してくれるだろう。日本も見直してくれるだろう。民族協和の模範国家を見せつけられたら、どちらも考へ直さずには居れぬ筈だ」⁽²⁴⁾。これは建国大学の創立に関わり、最初にその教育に従事した連中の悲願であった。

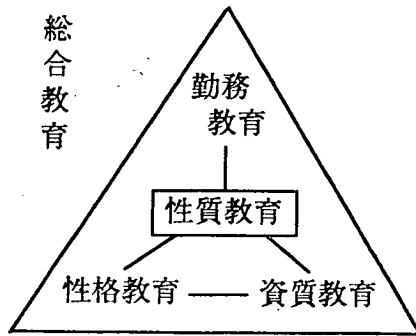
右の如く、建国大学は最初、理想国家満州国の指導者を養成するための機関として構想されたわけであるが、関東軍内部の主導権争いによって、学校の性格は次第に歪められ、その当初の理想とは大きくかけ離れたものになっていった。前述した如く、建国大学は関東軍の方針によって動かされ、その好むがままに運営されたわけであるから、当然の宿命であったのかも知れぬが、理想にもえて五族協和の学問を打ちたて、五族協和の実績をあげようと邁進していた建国大学の教職員や学生にとっては実に悲しいことであった。

二 建国大学の塾教育

建国大学の設立に関与した関東軍や参謀本部の軍人たちは、従来の大学の在り方に強い反感を抱いていた。彼等の眼には、大学の教育は欧米的な自由主義の横行するものと映つたらしい。斯かる大学は満州国にとって寧ろ有害であると考えた。建国大学の教育目標は「建国精神を体得し、その指導者たる性格を陶冶する為に、塾に於て日常生活を通して行はれる」性格教育を基本とした。そのため、全学生を塾（寮ではない）に收容し、日々起居の間に教育を実施することにした。

その他、「国家負荷の重任に当るべき資質を訓練する為に、精神・軍事・武道・作業の各訓練によって行はれる」資質教育、及び「国家の統治・経営の為の學術を修得させ、道義世界の指導者たる才幹器量を養成する為に、学科教授によって行はれる」勤務教育があった。以上の性格教育・資質教育・勤務教育を三本柱として、三者が相互に密接

な関連をもつことによつて、教育効果をあげることが期待された。なお、資質教育は性格教育に欠くことのできぬ栄養を与えるものと考えられた。而して性格教育と資質教育を併せて「性質教育」とし、この基礎の上に勤務教育を構築し、三者を一体化した総合教育が目標とされた。⁽²⁵⁾ 図示すれば上の如くなる。



性格教育を担当するのは塾務科、資質教育を担当するのは訓務科、勤務教育を担当するのは教務科とされた。但し、三者の中でも最も重視されたのは性格教育、即ち塾教育であった。建国大学の教育の原点は塾教育にあったと言つても過言ではあるまい。塾教育の根幹を示す「塾綱領」⁽²⁶⁾は左の如く定められていた。

塾は、起居の間に建国精神の真髓を体得し、其昂揚に不惜身命の自覚と信念を培ふ道場なり。

一、塾に於ては共同生活を通じて全員を永遠の同志たらしめ、協和精神の実践的先覚者たらしむ。

増進、智能の啓発、情操の陶冶につき切磋琢磨せしむ。
また「塾生心得」⁽²⁷⁾の冒頭には、次の如き条文が掲げられていた。

第一条 塾は建学の目的に鑑み塾綱領に則り、国家の棟幹棟梁たるべき修養を完ふすべき道場なり。故に自ら教学の統合実践に務め、確乎不拔の学風を樹立すべし。

第二条 塾に於ては厳格なる規律の間、霽々たる同志結束の美風を涵養すべし。

第三条 塾内外に於ける学生の行動は、一に建国大学塾生たるの自覚により、其の完璧を期すべく、着裝・姿勢・態度等、嚴肅端正純一にして質実を旨とすべし。

竹山増太郎は「至高の誇りと熾烈なる求道の精神が、無味なるべき塾生活に、常に限りなき光明を点ずる原動力ともなり、活気あり明朗なる塾生活の遂行を可能ならしめてゐるものと思はれる」と賛美しているが、余りにも表面的、観念的な把握ではなからうか。

さて、塾の構造はどのようになっていたのであろうか。竹山によれば「第一、二学年用の室は、一寝室に二十五人を收容し、寝室は畳を敷いて、一人一畳程度の割合、自習室は土間にて、二十五人分の机及び椅子を置いたと云う。江原によると「塾に入ると直ぐ裏まで突き抜ける廊下になっていて、その右側に教室位の広さの自習室があり、左側は自習室と同じ大きさの寝室である。……寝室や内部の構造は自分（江原）や石中の着任する前に、松本助教授が満軍の兵舎を規準にして設計したもので……壁に整理棚がとりつけてあるのは士官学校の通りである。便所と塾頭室は自習室側に、洗面所と物置とが寝室側に作られてある。便所は水洗式で、満州の田舎から出て来た学生を驚かした」と云う。このように塾の構造は、満軍の兵舎、あるいは士官学校の様式に倣つたもので、すべてが軍隊式であつたことは云うまでもない。

各塾にはそれぞれ塾頭一名を置くことになつていた。而して塾頭は普通教官を兼任する場合もあつた。大学設立の当初、塾頭に予定されていたのは、上述の石中（広次）、江原ともう一人、東北の農民道場から赴任してきた藤田松二の三人であつた。藤田は「血色の良い丸い童顔の持主、軀軀も二十貫近くあらう、堂々たるかっぶく」であつたといふ。その他、辻權作教授（陸軍少将）が強く推薦してゐた松本助教授（満軍大佐）がいたが、辻正信や三品隆以が賛成しなかつたと云う。「軍人としては典型的な人物であるが、学生の相談役には思想の方が問題になつた」由であ

る。又、根本竜太郎助教授は「最初から有力な候補者の一人であったが、彼は自らその任にあらずと称して辞退した⁽³⁶⁾」。結局、三人の塾頭で六塾の面倒を見なければならぬことになった。

然し、一人の塾頭が五〇名の学生を引き受けるのはどうしても無理だということで、助手を置くことになった。石中の塾には、既に建国大学設立東京事務所で働いていた、日本大学出身の工藤定雄がきまった。江原の塾には大同学院出身の浜崎武士⁽³⁷⁾が属官から助手に転じて配属された。藤田の塾には北原勝⁽³⁸⁾という助手が来た。彼は大学は農科の出身で、ハルビンの開拓訓練所の農場主任をしていたが、藤田の要請に応じて着任したものである。兎に角、塾頭三人、助手三人が揃って、新入学生を受け入れた。毎日の塾生活は、次のようなプログラム⁽³⁹⁾によって運営された。但し、夏時間と冬時間によって、多少時間の変更があった。

A、四月一日～一月三〇日

午前 六・〇〇 起床、洗面、掃除

六・三〇 点呼、遥拝、体操、勅書奉読⁽⁴⁰⁾

七・〇〇 朝食

八・〇〇 学科・訓練始業

午後 〇・〇五 中食

一・〇〇 訓練始業

三・〇〇 終業、入浴、理髪、兵器・被服の手入（自由時間）

五・三〇 夕食

七・〇〇 自習

九・三〇 点呼、静坐

一〇・〇〇 寢室消灯、自習室消灯

B、一二月一日〜三月三十一日

午前 六・三〇 起床、洗面、掃除

七・〇〇 勅書奉読

八・〇〇 朝食

八・五〇 屋外点呼

九・一〇 学科・訓練始業

午後 一・〇五 中食

二・〇〇 学科・訓練始業

四・〇〇 夕 終業

六・〇〇 夕食

(以下、Aに同じ)

この日課について、江原は次のように述べている。「朝は六時起床、すぐ掃除と洗面をすませて六時半の点呼、点呼は塾前の広場の国旗掲揚台の下で行ふ。祝祭日と月曜日には点呼に続いて国旗の掲揚式を行ふのであるが、ここに危介なことが起つた。⁽⁴⁾……国旗掲揚式には同時に国歌を歌ふのである。それが終ると、宮城と我等の皇居を遥拝。次ぎには体操か散歩。それが二十分か三十分で済んで七時の朝食。八時から授業に出て塾舎は暫くがらあきになる」。

「午前の授業が終ると一旦塾に帰り、昼食後又授業に行く。夕方は四時か五時に帰るのが普通であるが、農業の実習

だけは時間を超越して、時には定刻の夕食に間に合はぬことさへある。夕食後は自習が二時間。九時の点呼に続いて静坐十分間。故郷の父母を遙かに拝して九時半の消灯である。⁽⁴²⁾

但し、多少の例外もあった。「自習時間をつぶして行ふ座談会は、塾の極めて重要な行事である。毎週一回、或は隔週に一回位開かれる。消灯後は一般に眠りに就くのであるが、自習希望者は十二時頃まで自習室に居残ることを許してあった。内々では一時二時頃まで勉強する学生も居たし、民族の異なる学生間の討論は往々夜を徹して続けられ⁽⁴³⁾ることもあった。

塾の座談会は週一回、又は隔週という規定にかかわらず、よく行われたようである。塾頭の提案で開くこともあったし、学生の発意で催されることもあった。座談会で最初に出た他民族の学生の不満は、町で見る日本人が偉そうにしているということであった。彼らは一人一人が具体的な事実を訴えた。之に対して日本人学生は、事実を率直に認めてお詫びし、自分達が社会に出た時には、そんな無茶な事は満州から払拭しなければならぬと誓った。その後、座談会の話題は、開拓問題が中心になった。漢族の学生は、日本開拓民に追われる漢族の悲惨な運命を訴え、朝鮮人学生は朝鮮農民が営々辛苦してやっと水田を拓くと、すぐ日本人に取上げられて、今度は水利の悪い所に移住しなければならぬと嘆いた。こうして座談会のテーマは、倫理問題から次第に政治問題に発展して行つた。この傾向はどの塾でも同様だった。満州国政府の日本人官僚はこの事を聞いて快く思わなかった。思わぬ処で自分達の政策が批判されているからである。然し、満州国の中における日本人の横暴は到る処で公然として行われていた。このような事を平然とやり乍ら、どうして「五族協和」「王道楽土」などと云うことができようか。塾頭たちも実に苦しい立場におかれた。江原は「民族協和の大精神は、此の苦しい中から生れて来なければ、ほんものではないと確信して、座談会は秘密会として言論は完全に自由においた⁽⁴³⁾」。

他方、日本人学生から痛烈な批判をあげせることもあったと云う。それは漢人学生が塾の作業に熱心でないという問題で、切実な問題として大きく取扱われた。第一、朝の掃除は殆んど日本人と朝鮮人でしなければならなかった。漢人の洗面は毎朝石鹼を使つて恐ろしく長くかかる。一人で水栓を占領して点呼に間に合いかねる者さえある。江原に云わせれば「農業の実習は、朝鮮人以外の他民族は嫌ひな者が多かった。中には其の時間が来ると、何処かに姿を消す者が居た。或る時農場に出てゐる人数が余り少いので、あちらこちら捜してみたら、大勢教室で自習してゐた。頭を使ふ者は人を使い、体を使ふ者は人に使はれるとの古い觀念は此処でも見ることが出来た。日本人〔学生〕はこれを猛烈に攻撃した」⁽⁴⁴⁾。

五族協和を実現するため、各民族の学生を混合し、塾における日常生活を通じて各民族の相互理解を深め、民族協和を推進しようとして建国大学の創設に関与した日本人の考えは立派であった。然し、学内ではそれを実践できても、一步学外に出れば到る處で日本人の横暴な行爲が目についた。これは倫理的な問題として片付くものでなく、⁽⁴⁵⁾どうしても政治問題にまで発展した。塾頭たちが如何に献身的に学生に対応しても、これは解決不可能な問題であつた。⁽⁴⁶⁾

竹山増太郎は、これを第一段階における塾教育の失敗だと云う。而して竹山は失敗の原因をこう指摘する。「塾頭にその人を得たけれども、その編成上に欠くる点があつた為だと云はれる。最初に選ばれた塾頭は三名で、その内の一塾頭は、水戸学に通じ禅及剣によつて修練をつみし人、他の一塾頭は、農業立国の立場より農に徹せんとする熱意を持ち、今一人の塾頭は軍出身にて、⁽⁴⁶⁾士官学校式を経営に加味せんとする如く、各々強き信念と主張を持ち、一塾頭としては申分なく、塾生に対する指導力は誠に見るべきものがあつたと云はれる。然し三塾頭は、右に明かなる如く、それぞれ異なる意見を持つるものなれば、その相互間に於ける連絡、融合の点に於て、⁽⁴⁷⁾難点ありし為め、紛争を

避け得なかつたのであらう。之は仮りに、松下村塾と熊沢塾とが隣り合つた場合、果して何等の支障もなしに、その成果を挙げられたであらうかに類する問題であつて、士官学校的色彩の塾と、農民道場の色彩の塾と、高等学校式人格主義的塾との定型ありとして、斯かる塾を並列的に同居せしむれば、各塾それぞれの経営が如何に完全なものとしても、全体としては、円満なる運行を期し得ざることは、当然の勢であつて、破綻の因は此処に宿つてゐたのである。塾頭がそれぞれ自由に、自分の個性や、教育方針によつて指導する如き組織の場合、その實際をみれば、或塾頭は、峻烈厳正なる態度を以て、見事に其指導の任を果し、又他の塾頭は、寛容の態度を以て、然かも同様に見事なる指導の実を挙げる、兩者共教育的結論としては同じであるが、この場合、他の角度からすれば、同塾に居る同学生であることの故に、不公平だとの批難が起り得る。不識の間に、塾頭間に摩擦が生ずることは当然で、各塾頭が、教育に熱烈である程、その摩擦が一層強くならざるを得ない。教育は、客観的なものでありながら、然も甚しく主観的なものなる所に、かかる破綻の因が潜んでゐるのである⁽⁴⁸⁾。

右に引用した竹山の塾教育失敗の原因を要約すれば、三人の塾頭（石中・江原・藤田）がそれぞれ異なる意見をもつて、塾経営を進めた結果、塾頭間に摩擦が生じたためだと云うことになる。果してそうであらうか。前述したように、建国大学で最も重視されたのは性格教育即ち塾教育であつた。辻正信や三品隆以外にも、その観点から塾頭にふさわしい、強い指導力をもつた石中・江原らを選び出したわけであつた。彼らの個性の差異はあつても、塾教育の目標ははっきりしていた。彼らと共に塾の運営に参加した三人の助手もおり、それぞれに立派な成果をあげた。これを三人の塾頭の対立、摩擦と断定するのは、余りにも速断に過ぎるのではないか。筆者には、竹山が客観的な資料に基づいて、このような結論を出したとは考えられない。竹山の推測にすぎないと思われる。

実は、竹山が建国大学の塾教育が破綻したとする時期に、建国大学の運営に大きな転換が起つていたのである。そ

これは建国大学の生みの親、石原莞爾が陸軍を退いて、満州を去ったことである。石原は一九三八年六月、さらに八月に建国大学改革案を提出したが、結局激論の末受け入れられなかった。これは建国大学の今後に関わる重大問題であった。「他民族の学生はひどく残念がった。満州はやっぱり日本の植民地である」と⁽⁵¹⁾。

一年がたつて、新一年生を迎える時期が来た。「新一年には六人の塾頭が来てゐた。殆んど学科の教官の兼務である。二年の方も去年の助手が塾頭に昇格して、一塾一塾頭の制度が確立した。形式だけは整ったが、さて十二人の塾頭が集つて会議して見ても、一向に要領を得ぬものであった。しゃべる事は中々上手な人がゐるが、いざ実行の段になると、さう勇敢ではあり得なかつた。二年の学生は、一年の塾頭はどうも塾頭らしい気がせぬと笑つてゐた。実際その思想傾向、知識程度、人の好し悪しは別として、見渡したところ石中や藤田のようながちりした人物は見出せなかつた。もう塾は規律ある寄宿舎、塾頭は親切な舎監でありさへすればそれで満足しなければならなくなつて来た⁽⁵²⁾」。

「〔作田〕副総長は日滿に魁けて創始した此の塾を、何とかして育て上げたいと苦慮したが、自分はそれは根本的に間違つてゐることを知つた。塾は塾頭あつての塾である。卓越した教育者が出た時に、自然に塾が生れて来るのである。自分自身が塾頭にならぬ限り、塾舎を造つてから塾頭やいいと搜しまはるやうなことでは問題にならぬ。まして嫌がる教官を拝み倒して無理やりに塾頭室に引きづり込んだのでは寧ろ残酷だ。これは副総長の失敗ではなく、もともと辻〔正信〕の失敗である⁽⁵³⁾と断ずる」。

上に引いた竹山の塾教育の批判が、如何に上すべりの見当違いなものであつたかは、右の江原の手記を読めば明白であらう。塾教育はそれにふさわしい塾頭を得ない限り、成り立ち得なかつたのである。竹山は塾教育は第二段階になつて、強い個性による主観的教育よりは、客観的なものを重んぜんとする傾向が強くなつたと云う。更に、第三段

階に至って、各塾頭は「塾務科長なる中心に服することを強化し、更に又各塾頭は科長を通じて、親塾頭たるべき副総長の肢体たりとの認識に到達⁽⁵⁵⁾」したと云う。即ち、塾頭は全くその主体性を否定されることになった。辻正信や石中、江原の目指していた塾教育はこうして建国大学当局により抹殺されてしまった。絶望した江原は一九三九年一月末、建国大学を去つて北滿⁽⁵⁶⁾の呼蘭国民高等学校校長として赴任した。

おわりに

建国大学の再考察を意図しながら、本稿もまた非常に中途半端なものになって了った。塾教育の問題に重点をおいたが、もっぱら江原節之助の手記に依拠する結果になった。而もこれは初期の塾教育を考察したにすぎないが、後になればなるほど、建大の塾教育が形骸化したことは否めない。外面上、形式は整ってきたが、実質を伴わない塾になってしまった。この点については、更に検討を深めねばならぬ。前稿でふれた、一九四一年六月、突如中国人学生一七名が関東軍憲兵隊に逮捕され、旬日において第二次検挙が行われた点⁽⁵⁷⁾については、本稿ではふれることができなかった。建大内において漢族学生がどのように考え、どのように行動したかという問題については今後の研究課題としたい。

注

(1) 早稲田大学社会科学研究所『社会科学討究』九四号、一九八七年。

(2) 内海庫一郎氏は京都帝大経済学部出身で、蟻川虎三教授の弟子であったが、建大に赴任された。太平洋戦争末期には応召して沖繩戦に参加された。戦後は武蔵大学経済学部の教授に就任された。

(3) 江原節之助は、岡崎精郎氏の解説によれば、九州大牟田の入、名古屋幼年学校より陸軍士官学校に進んだが、在学中病氣のために退学。中等学校教員試験を受けて合格、各地の中学を歴任の後、府立浪速高校尋常科の教諭となり、漢文科を担当した。岡崎氏はこの時の生徒であった。一九三八年、建国大学が創立されると、名古屋幼年学校以来の同期生辻正信の強い勧誘により、建大に赴任した。

(4) 追手門学院大学『東洋文化学科年報』四、五、六号、一九八九〜九一年。本稿は、江原が敗戦後満州から引揚げ、余暇を得て一九五〇年秋に書き上げたものである。初期建国大学の実情が生々しく語られており、殊に塾教育については、これ程具体的に語ったものはないであろう。建国大学について考察する際の、すこぶる貴重な資料である。

(5) 『興亜教育』は一九四二年一月、東亜教育協会より発刊、目黒書店より刊行された。「発刊の辞」には「大東亜戦争に一億鉄火の熱戦を戦ひつつある時、吾等また教育の職域より此の世界史的壮図に参画して、本誌を世に送る」とある。竹山増太郎は大阪商科大学（現大阪市大）教授であった。

(6) 拙稿「〈満州〉建国大学の一考察」。

(7) 辻正信は、江原節之助とは名古屋幼年学校、陸軍士官学校と同期生であった。建国大学の具体的な構想を作ったのは辻自身であった。ノモンハン事件や太平洋戦争における彼の作戦参謀としての活動が喧伝されているが、斯様な側面もあったのである。

(8) 寛克彦（法学）は既に東大名誉教授であったが、平泉澄は東大文学部教授、作田荘一は京大教授、西晋一郎は広島文理大教授であった。彼らは軍部の推輓により建国大学の創設に関与、開学後は建大名誉教授に推された。作田は副総長、実質的な総長に就任した。

(9) 斉藤利彦（〈満州国〉建国大学の創設と展開―「総力戦」下における高等教育の〈革新〉）（『総力戦下における〈満州国〉の教育・科学技術政策の研究』学習院大学東洋文化研究所、一九九〇）では、建国大学を満州国の最高学府として扱っている。

- (10) 江原節之助「民族の苦悶―創設期の建国大学をめぐる―」(1)、五九、六〇頁。
- (11) 関東軍第三課(後に第四課)は、満州国に対する内面指導、実質的な統制権を行使していた。当然、建国大学も第三課の内面指導下におかれていた。江原が建大を関東軍の大学だと云う所以である。
- (12) 片倉衷には『満州事変機密攻略日誌』があり、当時の関東軍の動きを最も詳細に伝えている。古海忠之との共著『挫折した理想国―満州国興亡の真相』(現代ブックス社、一九六七)もある。
- (13) 江原、前掲論文(1)、六〇頁。
- (14) 建国大学総長は国務総理の兼務ということになっていたが、これは全く名目にすぎず、実質的には日本人の副総長が全権を掌握していた。
- (15) 江原、前掲論文(1)、六〇頁。
- (16) 学徒動員は戦時下の労働力不足に対処するため、学生生徒を勤労働員したことをいう。此処では学徒出陣と云うべきであろう。尚、建大生にも兵役免除はなかった。
- (17) 河辺善太郎「藤村慕情その二」(八旗一〇、一九八八)六〇頁。
- (18) 小谷部東吾「建国大学受験の記―当時の日記のままに」(八旗一〇)四八頁。
- (19) 小谷部東吾、同、四七頁。
- (20) 建国大学一期生の齋藤精一は四高入学をやめて、建大の方を選んだ。齋藤「回想昭和十三年―前期第一学年」(八旗一〇)二二頁。
- (21) 五族協和という場合、日本人、朝鮮人、漢人、蒙古人、ロシア人の五族を指し、満州人は漢人に含めて考えられていた。何故なら、当時純粋な満州人は殆ど存在せず、漢人に同化されていたからである。
- (22) 邑瀬喜和「建大受験事情」(八旗一〇)二二二頁。
- (23) 邑瀬喜和、同、一三一―三三二頁。

- (24) 江原、前掲論文(1)、六三頁。
- (25) 竹山増太郎「塾教育を中核とせる建国大学指導者教育」(興亜教育一―二、一九四二)九〇〜九一頁。
- (26) 塾綱領は、石中と江原が「建国大学令」を基にして作ったものと云う。江原、前掲論文(1)、六七〜六八頁。
- (27) 「生徒心得」は、松本助教が辻教授の指導の下に半年余りかかって作りあげた士官学校の生徒心得を焼き直したものがあつた。石中、江原らはこれを破棄して、法三章でゆくことにし、簡単なものを作成した。江原前掲論文(1)、六八頁。
- (28) 竹山増太郎、前掲論文、九二頁。
- (29) 一学年の学生定員は一五〇名であつたから、二五名というのは、一学年の六分の一に相当する。それ故、最初に六塾が建設されたわけである。
- (30) 注(28)に同じ。
- (31) 松本助教は、最初辻教授の意をうけて、建国大学に関する全般の準備を進めたい。然し、松本の立案したことは石中や江原の気に入らず、殆んど破棄されてしまった。塾頭に松本も起用する予定をしていたが、これも中止になつた。斯様な石中や江原の行為は、辻や松本には決して快く思われず、後の抗争の原因になつたのではなからうか。
- (32) 江原、前掲論文(2)、一四〇〜四一頁。
- (33) 藤田は農学校から高等農林、大学は農業経済学科を出て、農学校の教師から宮城県の農民道場長をしていた。農業に終始した生粋の農業指導者であつた。農業を尊ぶことは狂信的と思われる程であつたと云う。尚、藤田には農場主任という本務があつた。
- (34) 江原、前掲論文(2)、一三九頁。
- (35) 江原、前掲論文(2)、一四五頁。
- (36) 江原、前掲論文(2)、一四四〜四五頁。
- (27) 浜崎は全く学生と同じ生活をしたと云う。農業の実習を嫌う学生が多いので、彼は学生に伍して働いた。その態度は身を

以て率いるという厳めしいものではなく、学生と苦楽を共にして、親しくしていききたい位の軽い気持であったと云う。

(38) 北原は、大学は農科の出身で、ハルビンの開拓訓練所の農場主任をしていたのを、藤田が招いたという。藤田の下で塾と農場と両方かけもちで働いた。いわば北原は藤田の小型版であった、と江原は云う。

(39) 竹山増太郎、前掲論文、九三頁。

(40) 勅書というのは、建国大学の開学式に当って臨席した満州国皇帝が下付したもので、道徳主義の立場が一貫していた。勅書の起草は日本人の手になったといわれる。

(41) 国旗は初め満州国旗のみを掲揚していた処、満州国の法規では日・満両国旗を掲げねばならぬことがわかった。日章旗を上に掲げた処、満州国は日本の属国になって了ったと非難され、結局もう一本ポールを立てることとなった。

(42) 江原、前掲論文(2)、一四七頁。

(43) 江原、前掲論文(3)、七五頁。

(44) 江原、前掲論文(3)、七六頁。

(45) 拙稿「満州」建国大学の「一考察」(社会科学討究九四)一一九―二〇頁。

(46) これは江原のことを指しているが、彼は士官学校を中途退学して、中等教員となり、建大に赴任するまでは浪高尋常科で教鞭を執っていた。彼を「軍出身」というのは不当である。

(47) 江原の手記に拠る限り、石中、藤田、江原の三人は相互に尊敬しあい、その長所を認めあっていた。彼等の間に連絡、融合の点において難点があったと竹山が云うのは事実に戻すようである。

(48) 水戸高校教授だった石中広次は、水戸学を修めており、当時の高等学校教授が一般に人格主義的な立場をとっていたとは異なっていたと思われる。水戸在任中に水戸連隊にいた辻正信と知りあって肝胆相照らす仲となった。彼の推薦で建大に赴任したわけであるから、此処でも竹山の評価は間違っている。

(49) 竹山増太郎、前掲論文、九六―九七頁。

(50) 石原の出した建大改革案は、建大に対する関東軍第三課の内面指導の撤回を提起したものであった。然し、関東軍は石原のこの提案を拒否した。

(51) 江原、前掲論文(3)、八〇頁。

(52) 江原、前掲論文(3)、八五頁。

(53) 塾教育を熱烈に主張し、これを推進したのは辻正信であった。彼は建大教育の中核に塾教育をおいていた。その塾教育が挫折したわけであるから、江原がこれを辻の失敗だと云うのは当然である。

(54) 江原、前掲論文(3)、八五～八六頁。

(55) 竹山増太郎、前掲論文、九七頁。これは副総長（親塾頭）―科長―各塾頭というヒエラルヒーを設定しようとするもので、まさに塾教育の形骸化を目指したものである。

(56) 江原は一旦建大を去った後、呼蘭国民高等学校長、営口女子国民学校長、吉林省視学官を経て、一九四三年九月、建国大学助教（補職塾頭）に復帰した。更に、一九四五年一月には同大学理事官（補職庶務科長）に就任した。

(57) 前掲、拙稿一二三頁。

（助東洋文庫研究員）

A Reconsideration of Kenkoku University in "Manchuria"

YAMANE Yukio

The author published an article about Kenkoku University six years ago, and since then articles which regard Kenkoku University as the highest institution of learning in "Manchukuo" have been published. But in reality the university was established and managed by the Kuangtung Army, and was an institution for training bureaucrats for governing "Manchukuo." This fact is clearly pointed out in the memorandum written by Ebara Setsunosuke (former associate professor of Kenkoku University), which was often quoted in the present article.

Kenkoku University was proposed by Ishihara Kanji, a staff officer of the Kuangtung Army, and the concrete measure was drafted by Tsuji Masanobu. After Kenkoku University was founded, it was directed and managed by the Third Section (later the Fourth Section) of the Kuangtung Army. No Chinese in Manchukuo participated in the establishment of Kenkoku University. Most of the faculty members were Japanese, and those who occupied administrative positions in the university management were all Japanese as well. The chancellor of the university was the prime minister of the Manchurian Empire as a matter of form, but in reality the Japanese vice-chancellor held power. Half of students were Japanese, and the rest were Chinese, Koreans, Mongolians, and Russians. Under these circumstances how would it be possible to realize the principle of "Harmony of Five Peoples" (Gozoku Kyowa)? In June, 1941, seventeen Chinese students were arrested by the military police of the Kuangtung Army and were detained in the Changchun Prison until the end of World War II. The Chinese students were not able to believe in the idea of

“Harmony of Five Peoples” which was advocated by the university authorities.

The activities and ideas of Chinese students in the university were not touched upon in the present article, and the author regards this area as a topic for future research.